

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 現代日本語におけるカテゴリーの周辺例を明示する表現に関する考察

氏名 関 ソラ

論文内容の要旨

本論文は現代日本語における「カテゴリーの周辺例を明示する表現」を対象にし、各々のカテゴリー化の様相に注目して、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」としての特徴について認知言語学的な観点から考察したものである。「カテゴリーの周辺例を明示する表現」とは、「ペンギンはぎりぎり鳥である」の「ぎりぎり」のように、ある話題の対象があるカテゴリーの中心的な成員ではなく、周辺の成員であることを示す表現を指す。従来の「カテゴリー」と「カテゴリー化」に関する研究には、そのカテゴリーの中心的な成員に注目して考察が行われているものが多く、周辺の成員については十分な考察がなされていなかった。これに対し、本論文は、不特定のカテゴリーの周辺例を明示する「表現」に注目し、その特徴を探ることで、考察対象表現そのものの意味・用法を明らかにすると共に、その背景にある、話者によるカテゴリー化のプロセスを明らかにすることを目的としたものである。

本論文の考察対象は「カテゴリーの周辺例を明示する表現」に属すると思われる「ぎりぎり X (である)」「X の端くれ」「まるで X (である)」「もはや X (である)」「X と言えなくもない」「X とも言える」「X というのもおこがましい (Y)」「X とは名ばかり (の Y) / 名ばかり (の) X」「大した X ではない」「X っぽくない」の 10 表現である。本論文では、「カテゴリー化」の用法を持っていながらもそのような観点から十分な考察がされてこなかったこれらの 10 表現を対象とし、認知言語学的観点から「カテゴリー」と「カテゴリー化」、「百科事典的意味」に関する理論を援用して考察を行った。

まず、第一章では本論文の目的を述べた上で、本論文の考察対象を明確にし、考察方法を示した。

第二章では、考察において援用する「カテゴリー」と「カテゴリー化」、「百科事典的意味」に関する諸理論を概観し、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」について言及している先行研究を概観し、本論文の位置づけと考察における課題を確認した。

第三章から第七章においては考察対象の 10 表現の例文に基づいて考察を行った。10 個の表現はその特徴が類似しているもの同士を 1 つのグループにし、5 つのグループに分けてそれぞれ 1 つの章にまとめて考察した。

第三章では、話題の対象がカテゴリーの境界に近いことを表す表現である「ぎりぎり X (である)」と「X の端くれ」について考察した。その結果、「ぎりぎり X (である)」(X がプロトタイプ・カテゴリーである場合) と「X の端くれ」は、話題の対象を X の中心例と比較し、それと異なることから周辺例としてカテゴリー化するという点と、X の中心例から成る下位カテゴリーを拡張し、その拡張した X の中に周辺例として位置づけるという点において共通点が見られた。一方、「ぎりぎり X (である)」の話者の焦点は「話題の対象が X の成員であるか否か」にあり、その境界の向こうに別のカテゴリーの存在が含意され、「X の端くれ」の話者の焦点は「話題の対象が X の理想例であるか否か」にあり、話題の対象が X の成員であることは明確であるという点において異なることが分かった。

第四章では「比喩」用法を持つ表現である「まるで X (である)」と「もはや X (である)」を対象に分析を行った。その結果、両方とも X の成員ではない話題の対象を、X の成員と類似しているため X にカテゴリー化し、その中心例(典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ)と異なることから X の周辺例として位置づけ、X の中心例から成る下位カテゴリーを拡張し、その拡張されたカテゴリーにカテゴリー化するという点で共通点が見られた。しかし、「まるで X (である)」の X は話題の対象の持つある性質が顕著に現れるカテゴリーであり、「もはや X (である)」の X はあるプロセスにおける究極的な目標点・終着点である点、「まるで X (である)」は話題の対象と X の類似性にのみ話者の焦点が当てられるが、「もはや X (である)」は話題の対象の持つある性質が段階的に強くなると、究極的に X にカテゴリー化されるということに話者の焦点が当てられるという点において違いがあることが明らかになった。

第五章では「カテゴリー化」に関わる「と言う(言える)」を含む表現である「X と言えなくもない」と「X とも言える」について考察し、「X と言えなくもない」は「X とも言える」に比べて、話者の態度がやや消極的な表現であることが分かった。考察においては、「X と言えなくもない」が用いられる 4 つの場合、すなわち、①先行する発話やそれにより生じる含意を否定する場合、②生起・可能性・存在が皆無でないことを主張する場合、③断定・直接的な言い方を回避する場合、④和らげ・配慮を表す場合におけるカテゴリー化の様相について考察した。また、「X とも言える」もそれが用いられる理由によって①和らげ、②比喩、③言い換え、④誇張の 4 つに分けて分析を行った。その結果、両表現とも話題の対象を中心例と比較しない④以外、①～③の場合は X の中心例と比較し、それと異なることから、X の中心例から成る下位カテゴリーを拡張させ、話題の対象を周辺例として位置づけることが分かった。また、両表現はカテゴリー化の様相やそれぞれの用法上に共通点が多く見られるが、「X とも言える」が「話題の対象を X にたとえる用法」と「話題の対象のある特徴を誇張する用法」で用いられる場合は、「X と言えなくもない」に置き換えられず、「X とも言える」は X とは別のカテゴリーの存在を含意するという点において、違いが見られた。

第六章では「再カテゴリー化」が見られる表現である「X というのもおこがましい(Y)」と「X とは名ばかり(の Y) / 名ばかり(の) X」を分析した。両表現とも Y が明示されない場合は、X の成員である話題の対象が X の中心例(典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ)と異なることから、X の周辺例として位置づけることが分かった。一方、Y が明示される場合は、X の成員である話題の対象が X の中心例と異なることから、X の周辺例として位置づけられると同時に、Y の成員としても位置付けられ、再カテゴリー化が見られた。また、話者が X を X の中心例から成る下位カテゴリーに縮小させることにより、X の周辺例として位置づけられた話題の対象が X の成員から除外される意味となることが明らかになった。ただし、「X というのもおこがましい Y」は、Y より X のほ

うが（一）評価性を持つ場合も用いられることがあり、「Xとは名ばかりのY」は話題の対象がXという名称を持っていながら、Xの属性を持っていないことに焦点が当てられ、単に話題の対象の正体がXではなくYであるという事実を表すときも用いられる点において違いが見られた。

第七章では否定を含む表現である「大したXではない」と「Xっぽくない」を対象に考察した。その結果、「大したXではない」は、話題の対象がXの顕著例・理想例と異なることから、注目に値しないという話者の態度が現れること、話題の対象は本来Xの成員でなければならず、Xの内部において、中心例と異なることから周辺例として位置づけられるということが分かった。「Xっぽくない」では、話題の対象がXの典型例・ステレオタイプと異なることから、Xの周辺例として位置づけられることが明らかになった。「大したXではない」と「Xっぽくない」の比較分析の結果、両方ともカテゴリXの縮小が見られ、話題の対象がXの周辺例であることから、縮小されたXの下位カテゴリ（中心例から成るカテゴリ）に入らず、まるで話者によってXから除外されるような意味になるという共通点が見られた。一方、話者の焦点が「話題の対象がXの中心例であるかどうか」に当てられる「大したXではない」は、「中心例ではないが、Xの周辺例ではある」という意味を持つが、「Xっぽくない」は話者の焦点が「Xの成員であるかどうか」に当てられるため、「Xの成員としてみなすことができない」という意味となり、Xから除外されるという意味がより強くなることが分かった。

第八章では、第三章から第七章における考察の結果をまとめた。まず、10表現の共通点として、一つ目に、10表現全てにおいて（一部の下位分類・用法を除き）話者が話題の対象をXの中心例と比較し、両者が異なることからXの周辺例として位置づけるということが明らかになった。二つ目に、話題の対象と比較されるXの中心例には「典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ」の4種類があるということ、三つ目に、全ての表現において、カテゴリXの拡張または縮小が見られることが明らかになった。また、10語の表現の特徴をまとめ、「カテゴリの周辺例を明示する表現」の下位分類（①カテゴリXの拡張が見られるか、縮小が見られるかによる分類、②話者による再カテゴリ化が見られる表現とそうでない表現の分類、③話題の対象と比較されるXの中心例の種類による分類）を試みた。さらに、第三章から第七章における考察結果に基づき、各表現において話者が話題の対象をカテゴリXのどの位置に位置づけるかにより、「カテゴリの周辺例を明示する表現」としての10表現の位置づけを示した。具体的に言うと、Xの中心から境界の間には、「Xの端くれ（謙遜）」→「Xと言えなくもない」「Xとも言える」→「ぎりぎりX（である）」「Xの端くれ（謙遜以外）」「Xというのもおこがましい」「Xとは名ばかり／名ばかり（の）X」「大したXではない」「Xっぽくない」の順に位置づけられ、Xの境界からXとは別のカテゴリYの中には「XというのもおこがましいY」「Xとは名ばかりのY」が、さらにXが存在する認知領域とは別の認知領域には「まるでX（である）」「もはやX（である）」「Xとも言える（比喩）」が位置づけられる。

以上のように、本論文では、従来注目されてこなかった「カテゴリの周辺例を明示する表現」について考察してその特徴を探ることで、これらの表現を使う話者が話題の対象とカテゴリXのどのようなところに注目し、どのようにカテゴリ化するかを明らかにした。また、10個の「カテゴリの周辺例を明示する表現」が持つ様々な相違点について分析し、その結果に基づいて「カテゴリの周辺例を明示する表現」の下位分類と位置づけを試みたことにその意義があると言える。